



日本の歴史に6つの転機

大蔵財務協会顧問
(元環境事務次官)

石坂 匡身

私も日本人として、日本の来し方、行く末に大きな関心があります。来し方を振り返ると、これまでに6つの大きな歴史的転換点がありました。

第1は、3世紀中頃の古代豪族連合国家「倭」の誕生です。魏志倭人伝の卑弥呼、記紀の崇神が「倭」を大和纏向に創始、これを日本国家の黎明期と見ます。箸墓古墳、崇神陵などの前方後円大古墳はそれを象徴するものです。古墳時代は7世紀初まで続きました。

第2は、中央集権律令国家の形成です。大陸に巨大国家唐が成立、朝鮮半島を征し、百済に加担した天智が白村江戦に完敗、日本は危機に晒されました。抗するため豪族国家を改編、土地、人民を公地公民とし、徴兵、徴税権を天皇が握る新たな中央集権律令国家が7世紀後半の天智、天武、持統の時代に構築されました。律令国家は、奈良、平安時代と続きます。

第3は、頼朝の武士政権の創始です。武力を蓄え、公地公民制度を崩し、武士が世を支配する力を手にしました。その後、武士政権は、後鳥羽の承久の乱、後醍醐の建武の中興の朝廷反撃を破り、圧倒します。

第4は、戦国乱世を経て信長、秀吉、家康の天下統一、17世紀初の徳川幕府開設、封建支配体制の確立です。江戸は世界に冠たる百万都市となり、250年の江戸時代が続きました。

第5は、明治維新、近代国家への転換です。ペリー来航から西南戦争まで25年、維新実現、近代国家へ歩みだしました。開国決断にあたり、統治に自信の揺らいだ幕府は孝明天皇の勅許を求めました。天皇は攘夷破約を主張、尊王思想と結びつ

き倒幕運動となり、薩摩の西郷、大久保などの勢力により幕府は倒されました。

第6は、太平洋戦争です。大日本帝国敗北、連合軍占領、そして、日本は装

を変えて復活しました。米国との国力の差、敗けると分かっているながらの日米開戦は、政府・軍部の独米ソの状況についての自国本位の希望的情勢認識、当時の日本には過酷なことですが対米戦は避けるため中国からの軍撤退を決断できなかったことにより米の石油などの禁輸により資源獲得のため南進せざるを得ず、最後は対日強硬のハルノートが引金となりました。敗戦の結果、立憲君主制から象徴天皇、議会制民主制に変わり、戦争放棄で日本は経済復興をなしとげました。

今、日本は、地球環境問題、情報化・AIの時代、米国の絶対的地位の低下・中国の台頭の時代を迎え、第7の転機を迎えているのではないのでしょうか。

筆者は、和邦夫のペンネームで『倭 古代国家の黎明』、『頼朝と尊氏』、『戦国乱世と天下布武』を大蔵財務協会から出版。新刊『幕末・明治—激動の25年』を発刊予定。

